

## 議会図書館及び イエール大学所蔵 朝川収集本をめぐって

◎小峰和明、立教大学

### I 朝河収集本の全容解明

戦前の日本法制史学者でイエール大学教授だった朝河貫一がイエール大学とワシントン議会図書館双方からの要請を受けて日本に一時帰国し、積極的に資料を収集、その大半を日本で洋装本に仕立て直し、アメリカに送った。その数はイエール大学・議会図書館双方を合わせると、1万点、6万冊を越える膨大なものであった。1906、7年（明治39、40年）のことである。これを朝河収集本もしくは収集資料と呼ぶ。二十世紀初頭、アメリカにおけるごく早い時期での本格的な日本語資料のコレクションとして特筆される。朝河は図書館の初代東アジア部長にも就任、日本の帝国主義化や日米開戦にも異を唱えたことで知られる。朝河が日本に帰国する前年に日露戦争で日本が勝利し、アメリカのポーツマスで講和条約が締結されていた。アメリカと日本との交流のために日本を研究する必要性が強く意識された情勢が背景にあったと思われる。朝河はこの要請によく応え、質量ともに優れた資料を収集した。またこの頃、朝河は日本の外交政策に強い危機感を表明し、1909年、『日本の過機』を出版する。

朝河の収集した典籍の領域は多岐にわたり、基礎研究に必要なあらゆる領域をほぼ網羅していると認められる。その全貌は容易に知られることがなかったが、1987年から89年の3年間に及ぶ国文学研究資料館の海外科研による調査にもとづく「イエール大学蔵・日本文書コレクション目録」（「調査研究報告」11号、1990年3月）によって、まずイエール大学における蔵書資料の様相が明らかになり、ついでこの度のプロジェクトによって議会図書館目録が完成を見、ようやく朝河

収集本の全貌が掌握されるにいたった。今後の研究のおおきな足がかりを得ることができたといえる。

イエール大学では、朝河収集本の大半は貴重書収蔵の専門図書館バイネキ・ライブラリに収められているが、スターリング記念図書館の東アジア部にも146点ほどが未整理のまま置かれていた。国文学研究資料館調査の折り、これを整理し目録にはSMLの記号で架蔵番号をつけたが、2001年に再訪した折りもそのままの状態になっていた。いずれはバイネキに合わせて所蔵されるべきものであろう。

ところで、朝河収集資料には、もうひとつイエール大学のバイネキ・ライブラリに所蔵される日本イエール協会出資コレクションがある。これはイエール大学の日本人の卒業生を中心に組織されたもので、横浜に本部があったそうだが、現在は存在しないようだ。

1934年にここからの出資を受けて、朝河は別のコレクションを形成していたのである。しかもこのコレクションについては、朝河自身それ以後の収集本も含めて、1945年に『GIFTS OF THE YALE ASSOCIATION OF JAPAN』という英文の目録（略称・YAJ目録）を公刊している。国文学研究資料館の調査の折り、この英文目録をもとに、全点を山室規子氏が調査されていた書誌カードを合わせて、和文目録として報告書に同時に掲載した。

このYAJ目録本には、洋装仕立ての装幀はほとんどなく、ほぼ全点が原装のままである。古写本をはじめ貴重な資料がすくなくない。人麿図や天神影など掛幅の図絵や複製本など、写本から版本にたるまで内容・形態ともに多様であり、みるべきものが少なくない。1945年という太平洋戦争終結の時点での目録刊行には、日米開戦に異を唱えていた朝河の今後の日米交流へのそれなりの思いが感じられてならない。

## II 朝河収集本の特徴

1906, 7年の朝河収集本のほとんどは洋装仕立てになっているが、しかも日本でそのような装幀に変えられていたことが何より注目される。おそらく洋装でなければ書物として認知されないことが意識されていたためではないかと思われる。たとえば、東京大学図書館にもこの種の和装本を洋装仕立てにした本がみられる。西洋文化にともなう書物の一種の文化衝撃の実例であり、書物の歴史からみてもきわめて興味深いものである。

そのうち、和装の原装表紙が残されている場合と処分されてはぎ取られている場合とがあり、その差異に何か意味があるかどうかは判断できない。表紙がない場合、書誌学上貴重な資料が失われてしまっていることになる。

これら洋装表紙の扉に年次を示したゴム印が押されていて、それによって登録年代が確定できるのである。これはイエールもワシントンも同様である。

また同時にこれらの書物の多くは、当時の写字生といわれる人たちによって写されたものが大半を占める。もちろん原本のものもあるが、貴重な写本はあえて日本に残し、それを転写して、アメリカに伝えたのである。これは朝河の一貫した方針で、まさに卓見であった。今後、研究がさらに進めば、具体的にどの本をどのように写したかが解明できるであろう。明治期における書物の書写史の面からも貴重な例となるに相違ない。

それにしても書写に費やした労力は大変なものであったろう。コピー機もないし、写真機もそれほど普及していない時代にあつては、古書を写すことはいわば当たり前であり、戦前まではこれが普通であった。戦前の研究者はみずから写本を写すことがすくなくなかった。東京大学史料編纂所などは各地の史料を謄写して収集すること自体が重要な業務であった。また各地の文庫などでも、研究者の依頼に応じて書写するサービスもあつたようだが、それが一般的であったようだ。

この書写作業の担い手の多くは写字生といわれる若者であり、一種の学生アルバイトのようなものであったろう。ほとんど無名の写字生たちのはたした役割は無視できない意義があり、活字文化からは見えなくなった、隠された学的世界の基盤形成から見直されるべきことであろう。これを「写字生の文化」と名付けてみたいと思う。

たとえば、議会図書館の朝河収集本の中に、明治36年、本願寺留学生中野慧遠が『覚禅抄』を書写し、その労苦が序文に切々と綴られる。写字生がその労苦を直截に語る例は少ないので、これはきわめて貴重な例ではないかと思われる。

「写字生の文化」はたとえば南方熊楠のような存在にもかかわってくる。熊楠はロンドン時代、大英図書館で膨大な書物を次から次へ写し、『ロンドン抜書』にまとめた。また、田辺に落ち着いてから、神社祭祀問題の渦中に、これも万卷の書籍を深更に及んで写し続けている。これが『田辺抜書』である。今では忘れ去られつつある、写すという身体行為のもたらす意味を見直す必要があろう。

朝河収集本からは南方熊楠などにも共通する、「写字生の文化」が立ち現れてくる。今後の研究の進展を見守りたいと思う。

さて、朝河収集本はイエール大学と議会図書館とに分けられたが、その差異はどこにあるのか、従来はまったくわからなかった。イエール大学調査の折り、仏書関係が少ないことを感じていたのだが、はたして議会図書館からは大量に仏書が出てきた。長年の疑問が氷解した思いだった。今回の目録によって全容が姿をあらわし、解明におおきく近づくことになった。ある程度双方のコレクションの色分けをしていたことがこれではっきりしてきたが、その区分の契機が何かまでは、まだ明らかではない。これも今後の展開が期待される場所である。

仏書では、天台宗系統の資料が比較的多く、特定寺院の聖教をそっくり寄贈された可能性がある。一例をあげれば、「花山元慶寺」の印記の写本が多く、まとまったコレクションの可能性が高い。名高い僧正遍照ゆか

りの古刹であり、細かくみていけば、この種の例はほかにも出てくるであろう。

### III 貴重本をめぐる

以上のごとき朝河収集本の中で、とりわけ貴重なテキストについて最後にふれておきたい。

議会図書館所蔵分では、いわゆる古写本はほとんどないようだ。これに対してイエール大学所蔵分には、古写本がみられる。

すでに翻刻紹介したが（『平家物語の転生と再生』笠間書院, 2003年）、『元徳二年後宇多院聖忌曼荼羅供』がある。卷子1軸。元徳二年（1330）六月に行われた後宇多院の七回忌における曼荼羅供の法会儀礼の準備と当日の次第を記録した転写本である。応永32年（1425）の具注暦の紙背文書に相当する。この年をさほど下らない頃の書写と思われる。後宇多院は有名な後醍醐天皇の父、鎌倉最末期、南北朝の動乱にいたる時代の仏事法要記録として貴重である。

貼付された書き付けのメモによれば、本書は西洞院家旧蔵本で、明治37年（1904）に春和堂が入手、軸装を施し、滋野井家からすき返しの表紙を譲り受けたという。イエール大学の書票は、1907年であり、朝河教授が春和堂から直接入手したのであろう。

朝河収集本で最も書写年時の古いのは、YAJ目録分になるが、建長五年（1253）写の『伝法許可作法次第』であり、他に元龜二年（1571）、尊円法親王筆の『雲州消息』がある。

また、国文学研究資料館の調査目録作成の折り、スターリング記念図書館分（SML）にありながら目録に漏れたものが2点あったので、追記しておきたい。神明説話の『日吉山王利生記』、お伽草子の『はまぐり』である。後者は紺表紙の絵入り横本で、本文は渋川版とおおきく変わらない。前者は絵入り3冊本である。

さらにイエール大学には、二曲一双の古文書張り交ぜ屏風があり、建久三年（119

2）から延享四年（1747）にいたる興福寺を中心とする南都の論議などの古文書が貼付されていて貴重である。

今後は議会図書館とイエール大学の双方に目配りした総合的な朝河収集本の研究の積み重ねが必要であろう。また、朝河収集本以外の議会図書館資料としては、旧陸軍参謀本部所蔵の兵法書コレクションが注目される。とりわけ『訓閲集』が大量に出てきたので、これも今後の課題としたい。